

オンラインと対面を組み合わせた国際理解教育に関する 授業実践と考察

澤崎 敏文・野本 尚美

(2023年3月6日受理)

A Study of Course Design for International Understanding Combining online and face-to-face

SAWAZAKI Toshifumi・NOMOTO Naomi

要旨：本学では、これまで学生がリアリティを持って学習できる環境を構築するため、企業と連携したPBL型授業を実践してきたが、近年の海外志向学生の増加等により、2019年度には台湾の現地企業と連携したPBL活動の実施、2021年度にはオンラインによる海外企業とのPBL活動をモデルケースとして試行してきた。今回は、これまでの課題と考察を踏まえて2022年8月末から集中講義として実施した「国際理解」において、対面とオンラインを組み合わせた授業実践についての考察を行う。

Key words：国際理解 海外研修 PBL オンライン授業 授業設計

1. はじめに

近年、社会人基礎力が提唱され、多くの大学等でアクティブラーニング型の授業設計を実践しているが、本学でも、企業・地域との連携によるPBL型の授業を積極的に取り入れてきた¹⁾。また、海外活動に興味を持つ学生も増加傾向にあるなか、本学が位置する福井県の企業には海外、特にアジア圏へ進出している中小企業が多く、多様な人材育成の必要性が高まっており、短期大学における実践的なキャリア教育の一環としての可能性も含めて、2018年から2019年度にかけて、海外（台湾）でのPBL活動の可能性について、調査・研究を行ったところである²⁾。一方で、世界的に流行した新型コロナウイルスの影響により、国際系カリキュラムを持つ多くの大学同様、海外渡航を伴う教育プログラムが実施困難になっているなか、どのような形で授業を設計し、正規カリキュラムとして取り入れていけばいいのか等の再検討が必要となっている。そこで、2021年度には地元企業、海外（タイ・バンコク）等と連携して

オンラインを活用したPBL活動をモデルケースとして試行した³⁾。

今回は、このような環境変化のなか、これまでの実践と考察を踏まえて、2022年度に実施した集中講義「国際理解」の授業について、オンライン活用（同期・非同期併用）と対面（面接）授業双方の組み合わせについて、学生インタビューから見えたそれぞれの利点と課題を踏まえた授業設計についての考察である。

2. オンライン海外連携の利点と課題

これまで、海外と連携したPBL授業を設計する場合、物理的な距離や時間的制約から、(Step1) 事前学習、(Step2) 現地での研修、(Step3) 帰国後の事後報告等、といった明確な区切りをつけて授業設計を行ってきたが²⁾、すべての実践過程にオンラインの要素を組み込むことで、物理的かつ時間的な制約からある程度開放されることもわかった。そこで、国内外を問わず、オンラインを活用した外部連

携型PBL活動のメリット・デメリットについて、2021年度の実践を踏まえてまとめたのが以下である⁵⁾。

2. 1 オンライン化のメリット

オンラインを積極的に取り入れた場合、これまで想定していた事前学習、現地での演習といった物理的・時間的制約から解放されることで、その期間全体が1つのプロジェクトであるという参加学生の意識が高まり、本来のPBLの目的に近づくのではないかと考えられる。また、海外の関係者と時間的な制約を気にせずにコミュニケーションをとることが可能となるため、密度の高いプロジェクト活動が期待できる。さらに、プロジェクトにかかわる時間・頻度が向上することで、プロジェクトに対する責任感も高まり、いわゆるお客さんとしての参加ではなく、当事者としての関わりも期待できる。

2. 2 オンライン化のデメリット

これまで、海外だからこそあった緊張感や期待感の低下が懸念される。これは、海外渡航することの特別感がなくなることで、非日常感がなくなり、「慣れ」によるプロジェクトの質の低下等もデメリットとして考えられる。よって、オンラインの場合には、これら「慣れ」をいかに防ぐかという視点での環境設計が必要になると考えられる。

2. 3 海外連携特有の課題

前述のオンライン化のメリット・デメリットに加えて、一般に、海外連携型PBLを実践する場合、以下のような課題に直面する²⁾。

①プロジェクトの継続性の確保

継続的に授業を実施していくためには、協力していただく企業等のメリット等も含めた企業側の負担を考慮する必要がある。そのため、授業設計にあたっては、企業側に過度の負担とならない日程や内容を考慮する必要がある。

②課題の設定の困難さ

海外PBLであるが故の言葉の問題（日本企業の現地法人の場合には問題にならない）や、遠方であるが故の調査等の時間的制約があること。ただし、

近年ではオンラインによる事前の情報収集が容易になっているため、短期滞在であることの制約は授業設計次第で、ある程度解消できる。

③文化交流的側面への配慮

授業のなかで、プロジェクトを通じた文化交流等の機会を設けるか否かも課題となる。特に、本学の場合、国際理解教育を主とした海外プログラムとしてPBL活動の実施を予定していたため、海外に「滞在」することに学生の期待や満足度が集まり、代替措置としての「オンライン」となった場合には、それら価値は代替不能な部分でもあり、現地で参加するという「リアリティ」のようなものをいかにプロジェクトとして担保していくべきかを考慮する必要も出てくる。2021年度実施の授業での学生インタビューからも、「交流したという実感が乏しい」という意見があったように、このリアリティの欠如は、海外プログラムに限った話ではなく、これまで教室で行われてきた授業をオンライン化したときの「物足りなさ」が何に起因しているのか、という問題にも共通する部分になると考えられる⁵⁾。

3. 2022年度授業の設計と実践

これまでの考察、反省点を踏まえて、2022年度の授業「国際理解」について、以下のような内容で授業設計を行った。

○授業名：国際理解

○実施時期：2022年8月29～9月2日、9月13日

○授業形式：集中講義

○受講対象：本学2回生

今回の授業では、現時点での新型コロナウイルス感染状況等を考慮し、海外渡航を伴わない授業設計とした。そのため、LMS（Moodle）を活用した非同期型オンライン、Zoomを活用した同期型オンライン、ゲストによる対面（面接）型授業の流れを組み合わせた。また、課題提示等でご協力いただくゲストとして、以下の2名の外部講師に、それぞれ異なるスタイルでの参加依頼をおこなった。

【ゲスト1】Mina Lama氏（以降「ミナ先生」と略す。）

日本での生活経験があり、現在は母国ネパールで旅館業、日本語学校の経営、女性支援のための活動をされている。

【ゲスト2】Mangulabnan Pauline Anne Therese Malaya氏（以降「ポリン先生」と略す。）

フィリピン出身で、日本の大学に留学後、研究者を経て、高等教育機関にて専任教員として勤務されている。日本の文化にも深く精通しており、社会活動として、福井で着物の着付け等を教えている。

一般的なPBL型授業同様に、授業前半で課題等の提示・検討をおこない、学生自らが課題解決に向けた調査を実施。Moodleでの非同期型、対面での同期型、双方の議論をおこない、課題等に対する提案をまとめるという流れである。特に、今回の授業では、授業中盤をさらに前半と後半に分けて、前半ではZoomを活用したゲスト1との授業、後半はゲスト2による対面（面接）型授業とした。なお、ゲストは二人とも日本語対応可能であるため、授業の主要言語は日本語であるが、一部補足的に英語を使用した。

なお、以下に、当初想定した授業の流れを示す。（補足：当初、下記の流れを予定していたが、諸事情により、ポリン先生の対面講義のみ、ステップ3の最終プレゼンテーション後に実施している。）

【ステップ1】

国際理解についての問題意識の共有、ネパール、フィリピンに関する調査、議論（一部、Moodleの



写真1 国際理解授業の様子

オンラインフォーラムを活用して、非同期でも実施)。また、2か国に関する調査、ゲスト2名への質問等のとりまとめを行う。

【ステップ2】

ゲスト2名による講義

○Zoomによる講義

ミナ先生から、ネパールの社会情勢、歴史、現況等について学び、ミナ先生の活動（ホテル経営、日本語学校の経営、女性支援のための活動等）について全員で議論をおこなった。



写真2 ミナ先生とのZoomでの授業の様子

○対面による講義

ポリン先生から、フィリピンと日本との違い、日本での経験、日本の文化について学び、その後、日本の着物の着付け（帯の結び方）を全員で体験した。



写真3 ポリン先生と帯結びを体験する学生たち

【ステップ3】

多文化共生と自分たちが考える国際協力というテーマでグループごとに調査、プレゼンテーションを実施した。



写真4 最終プレゼンテーションの様子

4. 参加学生へのインタビュー調査

受講した学生のうち4名（A、B、C、D）に対してインタビュー調査を実施した。インタビュー開始時には本研究の目的を口頭で説明し、インタビュー内容の研究使用と、ICレコーダーによる音声記録の許可を得た。この調査では、あらかじめ質問内容についてある程度決めておき、状況に応じて質問を変更したり追加したりしながらデータを収集する半構造化インタビュー形式を採用し、授業の事前インタビュー、事後インタビューをそれぞれ次の方法で学内において実施した。音声データの文字起こし後、発言内容をテーマごとに分析した。発言内容は学生の語りのニュアンスを伝えるため、可能な限りそのまま記載した。

4. 1 事前インタビュー

事前インタビュー実施日：2022年6月15日～7月20日

時間：一人約10分～20分程度

○国際理解を履修した理由

今回の授業を履修した理由については次のとおりである。以下の発言から、具体的な目的をもって履修したというよりも、漠然とした海外への興味・関心、かつ、ゲストとの具体的な関わり、会話等のコミュニケーションを期待しての履修であることが伺える。

- ・海外ってというか、国際的なことにちょっと興味があるから、国際理解でちょっとでも日本以外のことを知れたらいいなと思って取りました。(A)
- ・ゼミで英語学習を研究テーマに行くから、国際

理解だし、英語だし、取ったほうがいいかなと思って履修しました。国際理解だから、海外のこととか、どんな状況なのかとか、日本と違うところとかを学べたらいいなって思っています。(B)

- ・英語に興味があって、海外の人と関わってみたいなと思ったので履修しました。高校のときに海外に行く予定だったんですけど、コロナの影響で行けなかったので、海外にも行ってみたいし、海外の人と会話できたらいいなって思っています。日本と海外の生活の仕方の違いとか、学校生活の違いは聞きたいです。(C)
- ・もともと自分が外国とかに興味があったので、どんな内容するかっていうのはあんまり詳しくは分かってなかったんですけど、国際理解っていう名前とかに引かれて履修しようかなって思いました。(D)

○海外の人と交流した経験

国際交流に関する経験については次のとおりである。以下の発言から、国際交流経験に関しては、外国語、特に英語を使う交流という認識の学生が多いことが伺え、また、外国語を使うという点を期待しているとも考えられる。

- ・高校のときに、修学旅行がシンガポールとマレーシアで。初めての海外だったから、結構楽しかったっていう印象もあるけど、でもやっぱり自分がいつも使ってる言葉を使えない国だから、すごい不安な気持ちもありました。英語の実力に関しては、正直言うと、ちょっとへこんだりはしたんですけど。調べて伝えようっていうふうに、どうすれば伝わるっていうのは分かったし、何でも努力が大切になって思いました。(A)
- ・特にないです。(B)
- ・小学校とか中学校もALTの先生と話す機会があったり。でも高校は、ALTの先生とも話す機会がなかったです。(C)
- ・ALTの先生ぐらいですかね。海外の人と交流。あと高校にフィリピンの子がいて、その子と、結構、部活一緒やったりとか、クラスも一緒だったりのしたので、お話ししたり、その子と、ちょっと

1回英語で会話してみようとか言って、会話してたこともありました。(D)

4. 2 事後インタビュー

事後インタビュー：2022年10月19日～11月2日

時間：一人約10分～20分程度

○授業を終えての感想

授業後の学生の全体的な感想は次のとおりである。

ミナ先生の授業（ネパールとZoomで通信）に関しては、学生の事前調査では得ることができなかった現地の実際の生活、状況などを現地の方から直接語っていただくことで、学生の印象に強く残ったことが伺える。距離・時間といった物理的制約から、普段気軽に行くことができない地域とのリアルタイムの交流という点も、オンラインの利点として感じていることが伺える。

- ・私たちが絶対、知れないようなことだったりミナ先生とか、澤崎先生が、いろいろ裏のこと、だから貧困している村だったり、そういうことについて聞いたのはすごいよかったなと思います。(A)
- ・海外の人たちのことを知れたっていうのは、受講してよかったなと思ってます。なんか初めはアメリカとかかなと思ってたんですよ。こういう授業でしか、やっぱり自分から調べることってあんまりないじゃないですか。フィリピンとか。だから、そういう授業でそういう知れて、それはすごいよかったなと思ってます。まだ全然、日本と違うこともたくさんあって、結構、衝撃な部分もあったから。ネパールは、まだ女性は教育しなくてもいいみたいなのがあるみたいなのおっしゃってたので、それが昔の日本とかだったらまあ、分かるんですけど、それがまだ残ってるんだなみたいなのが、ちょっと驚きでした。(B)
- ・私、日本から出たことないんで、他のその地域、国のことがネットの情報とかしか分からなかったんで、本とか。なんでそういう現地の方の声を聞くことができたのが、やっぱり一番、大き

かったかなって思います。(B)

- ・外国の人と関わる機会もない中で、外国の人に来てもらって話が聞けてよかったなと思います。イメージどおりでした。学校行くのでも反対する親とかもいて、私たちは普通に学校行けてるし、なんかそれが当たり前じゃないんだなと思いました。(C)
- ・貧富の差とか、そういうのに関しては、私たちは本当、表面的なことしか見れてないし、表面的な支援を行ってる人のほうが多いなと思ってました。支援と言ったら募金がいいのかなって思いがちだけど、そうじゃないってことをそのときに、ああ、なるほどなって思いました。(D)
- ・(ミナ先生の経営する) 旅館でしたっけ。そういうのをやってる人、日本人の人がいて、みたいなの。そうやって踏み切った人というか、そういうことしようって思ったその日本人の人、すごいなあと思ったし、自分が本当にもう日本でとか、自分の人生をやり切った感とかがあったら、そういうことなんかしてみたいなと思いました。(D)

ポリン先生（教室で対面）の授業に関しては、日本の文化である着物の着付け、帯結びを英語で海外の方から学ぶという特殊な体験が、学生に強く印象に残っていることが以下の会話から伺える。特に、受講した学生全員が帯を結びながら講師とのコミュニケーションを英語、日本語を交えておこなった体験は、学生の高い満足度につながっていると考えられる。

- ・英語を話す外国の人が日本語を話すときに、これちょっと（発音が）違うよって思っても、海外の人にとっては注意してほしい、直してほしいことであったりするから、それは積極的に直してあげたりとかしたほうがいいのかなと思ってました。(Aさん)
- ・個人的な意見なんですけど、海外に行くときに言語って重要じゃないですか。でもその言語をちゃんと話せなくても伝わるっていうことをポリン先生の帯のやつで学んで、そういうジェスチャーとか一緒にやったりすれば相手には伝わるから、言語をしゃべれないから無理やって

いうふうに、諦めることはしなくてもいいんだなっていうのは思いました。(A)

- ・想像してたものより、すごく楽しくできました。ポリン先生の授業で、発表したり、あと帯の結び方だったり、そういうのをみんなで一緒にやっていくっていうのがすごく楽しいなって思いました。(A)
- ・(帯結びは)楽しかったですね。「日本の文化(別の授業)」を取ってたから、やり方はちょっと分かったんですけど、でも、みんなでこう、そこあれ、ここあれだよとか、きれいだね、みたいないうのもコミュニケーションになって、すごいよかったです。(B)
- ・(帯結びは)日本の文化でやってたときは日本語で教えてもらってたけど、実際、英語で教えてもらってなると、分からない部分もあるし、難しかったです。(C)
- ・ポリン先生のお話聞いて、最後のほうっていうか、みんなで帯、結んでるところあったじゃないですか。あれ見て、英語だけど伝わるみたいな、そんな感じがしました。別に共通の言語がなくても何とかなるっていうか。多分、今とか私、全然、完璧に英語しゃべれるって感じじゃないけど、勉強することも大事ですけど、別に今の段階で海外行っても、何とかなるかなっていうふうには思いました。(D)

○対面・Zoomについて

対面での授業、Zoomでの授業についての意見は以下のとおりである。Zoomの良さについて言及する学生がいる一方で、体験という点、コミュニケーションの取りやすさという点からは、対面での授業に満足感、充実感を得ている学生が多いことが伺える。

- ・ポリン先生のときはそうでもなかったんですけど、ミナ先生のときはZoomだったんで、コミュニケーションを取りにくいじゃないですけど、質問ある人っていうふう聞いてはくれてたんですけど、やっぱりZoomだと聞きにくいって言うところはありました。(A)
- ・やっぱり対面のほうが、なんですか、みたいな

聞いてくれたりして、コミュニケーションは取りやすくなって思うんですけど、でもZoomでも、その家の様子じゃないですけど、今、住んでます、みたいとか、そういうのが分かるのもいいんで、どちらでも学べることは学べるなと思いました。(B)

- ・やっぱり対面のほうがいい。対面やと、なんかコミュニケーションとかも取れるし、相手の顔がちゃんと分かってるから、Zoomよりかはいいなって思います。(C)
- ・対面のほうが私はいいかなって思いました。私たちの反応とかも踏まえて、分かってなさそうなところとかをポリン先生なんか言ってくれたとかもあると思うんで。Zoomでやるよりは対面がいいかなって。(D)

5. インタビュー後の授業設計に関する考察とまとめ

今回の授業の設計のポイントは3点あり、いずれも2019年度実施の台湾での実践⁴⁾、2021年度実施のオンラインPBL活動での意見⁵⁾を反映した。

1点目は「リアリティの確保」である。昨年実施したモデルケース後のインタビュー調査では、「(オンラインのみだったため)交流した実感が乏しい」という意見が多数みられたことから、本年度の授業では、2人のゲストに参加していただき、一人はオンライン(海外)、一人は対面(国内・教室での参加)とし、直接コミュニケーションができる機会を確保した。2点目は「意見交換しやすい環境の確保」である。2021年度の学生インタビュー調査から、オンラインによるPBL活動の場合、距離的な制約、時間的な制約を超えて、「比較的短時間で多種多様な人の意見を聞くことができる」、「画面上のみでのコミュニケーションであるため、人見知りせず気軽に参加できる」という点をメリットとして挙げていた学生が多かった。そこで、LMS(Moodle)のフォーラム機能を活用した非同期型のオンライン討論もあわせて実施するなど、オンラインのメリットを最大限取り入れるような工夫を行った。3点目は、文化交流的側面等への配慮である。これは、1点目の「リアリティの確保」とも関連するが、2021年度

図1 インタビューから見たオンライン・対面の利点と課題

	利点と考えられる事項	課題
オンライン (同期型)	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に行くことが難しい地域の方々と、場所・時間の制約を超えて気軽に交流できる ・文献上だけでなく、現地の方々の生の声、生の雰囲気を知ることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションが取りにくい（質問しづらいという意見があった。） ・音声等聞き取りにくい場合がある
対面授業	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで一緒にするという一体感があった ・非言語コミュニケーションが容易（ジェスチャーや表情などで相手を察することができるため、伝わっている感覚が強い） ・講師・学生双方の表情などを確認しやすいため、お互いの反応を確認しながらコミュニケーションを取ることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・場所や時間などの制約がある ・語学力の必要性等

実施のモデルケースでは、タイ・バンコクの企業数社に参加していただいたが、全て日系企業であり、オンラインである場合、海外とのやり取りをしている実感が乏しかった。本年度の当該授業は国際理解教育を主とするものであることから、多文化共生、異文化理解等に関連したゲスト・課題となるような設定を行った。

前述のインタビュー調査にもあるように、海外との関わりを期待するコメントもあり、学生は、リアルな「体験」を期待していることが伺える。実際に、2人目のゲスト、ポリン先生の回では、着物の帯の結び方を英語で学ぶという取り組みもおこなわれ、学生の満足度が高かったことがインタビューからも見て取れる。海外の方から英語で日本の文化を学ぶという特殊な体験を対面により教室内でおこなうことができたことは、授業設計における「リアリティの確保」、「文化的側面への配慮」にも寄与していると考えられる。

今回の学生インタビューから、国際理解・多文化共生をテーマに、コミュニケーションを密にとることを期待するような授業内容の場合には、改めて対面授業の良さが浮き彫りになった。一方で、オンライン授業では、実際に訪問することが難しい地域の方々との気軽な交流が可能になるなど、時間的・費用的メリットも大きいと感じた。

今回は、質的側面からの学生インタビューを通じた授業設計の考察であったが、コロナ禍も収束が近づきつつある現在、徐々に対面（面接）型授業に戻っていくことが予想されるが、今後は、オンライン・

対面それぞれの良さをとり入れた授業設計となるように、質的のみならず量的な観点から研究を進めたいと考える。

引用文献

- 1) 澤崎敏文(2016)『地元企業等との連携によるPBL型授業設計とその実践』日本教育工学会第32回全国大会講演論文集, pp.163-164
- 2) 澤崎敏文, 野本尚美: “海外での企業連携によるPBL型授業設計と実践に関する考察”, 仁愛女子短期大学研究紀要第53号, pp.13-18(2021)
- 3) 澤崎敏文, 野本尚美(2021)『オンラインを活用した海外企業連携によるPBL型授業設計に関する考察』教育システム情報学会第46回全国大会講演論文集, pp.23-24
- 4) 野本尚美, 澤崎敏文: “PBLとしての海外実践活動と学習効果に関する質的研究”, 仁愛女子短期大学研究紀要第54号(2022)
- 5) 澤崎敏文, 野本尚美: “オンライン活用による海外連携PBL実践から見た課題と考察”, JSiSE Research Report, Vol.37, No.1(2022-5), pp.35-39(2022)